



百子部

百子部

弘長百子 乾坤

百子部 上中下

特別
84
8196
5



836
14
8196
5

弘長百首

作者

入道前太政大臣

常盤石千殿實氏公又号西園寺後九条

正二位藤原朝臣

正二位藤原朝臣衣笠前内膳家良公

入道民部卿

為家卿中院大納言法名融覺

正三位行中納言兼侍從臣藤原朝臣為氏

正三位行侍從臣藤原朝臣行家

号九条建治元年卒

沙弥穿西俗名藤原信實朝臣



題

春二十首

初春

春雪

柳

花

歎冬

夏十首

卯花

五月雨二首

霞

暮寒

春雨

喜月

三月

郭云三首

螢

鷺

梅二首

歸鴈

藤

夏月

夕立

約凍

秋二十首

早秋

露

薄

初鴈

霧

冬十首

初冬

冬月

夕

萩

虫

月音

紅葉二首

時反

霧

七夕後刻

萩

麻

掃衣

暮秋

落葉二首

雪三首

歲暮

憲二十首

初志

初志

遇不逢志音

雜二十首

曉

山

閑

山家二首

忠憲二首

曉別志

志志二首

松

河

旅二首

田家

不逢憲五首

後刻志

恨忠

竹

榴

海路

述懷二首

懷舊

秋教

神祇

祝發



詠百首和歌

春二十首

初巻

實空

あさ日の中 新色 ぬくもりに 春の 風 吹く かな
かみゆき 卒

基家

雪の残 春の 風 吹く かな
十巻

家良

あさ日の中 春の 風 吹く かな
十巻

融覚

あさ日の中 春の 風 吹く かな
十巻

居士

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

行家

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

来馬

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

震音

實空

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

同

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

基家

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

同

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

家良

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

同

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

融覚

あまのついでにふたつとていふはふたつとていふはふたつとていふは

同

Handwritten cursive text

居長

Handwritten cursive text

同

Handwritten cursive text

仍家

Handwritten cursive text

同

Handwritten cursive text

津西

Handwritten cursive text

同

Handwritten cursive text

篤

實空

Handwritten cursive text

基家

Handwritten cursive text

家良

Handwritten cursive text

融覚

花のぬき屋まうれうへいあゝゑ乃ほしやうまわ

為氏

昔乃とまうりやうそん最乃まうりや春のうら

行家

かゝりやうむあふ今うまう早乃家乃うらこい

宗西

首乃のりあひはのちうむれはまうりやあひ

実定

實定

あまうりあひあひあひあひあひあひあひあひ

基家

ねいあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

家良

村松

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

融覚

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

為氏

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

為氏

あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

基家

あつたてはなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

同

梅はこれ菊のよきもの梅はこれ松のよきもの梅はこれ松のよきもの

家良

あつたてはなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

同

あつたてはなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

あつたてはなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

融覚

梅の枝

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

同

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

若氏

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

同

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

行家

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

同

梅の枝はなほいふことなるも水端乃梅乃志は是也

基

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

家良

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

融覚

新抄

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

福氏

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

行家

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

律西

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

帰唐

實直

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

基家

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

家良

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

融覚

この世の事々業々とは不常なりと云ふは此の世の事

同

我ら此の世に生かされしは
ちりて

同

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

同

ちりて

書風

東西

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

同

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

同

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

同

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

同

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

春日

實空

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

基家

我ら此の世に生かされしは
書風と云ふは

家良

花乃春と霞のとけの月よはるの御心をば

融覚

わすれぬ心は乃白しとて記すの言井よ

為成

うよもあはれん心とせぬ影の中をよ

行家

まればの春とて月乃やよをば

来西

つすじ春の月の新ううとふね

藤

實空

わらわの心は乃かきとて

基家

あまの心とて心は乃かき

家良

かきとて心は乃かき

融覚

かきとて心は乃かき

為成

かきとて心は乃かき

雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

行家
辛酉

後雪のちりのちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

歎冬
實定

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

基家

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

家良

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

融覚

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

清氏

雪野川岩山と水よわたりて花をふりぬるかた

行家

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

辛酉

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

三月盡
實定

ちり雪のちり松木をうらやみたり花をふりぬるかた

基家

ふんやうしうしんやうたふんやうたふんやうたふんやうた

家良

吹風乃ききんこ花にちりせせよとてきんこふん

融寛

血れうにちひりせよとてきんこふんやうたふんやうた

若氏

かみんこふんこふんこふんこふんこふんこふんこふん

行家

ふんこふんこふんこふんこふんこふんこふんこふん

疾西

ふんせんやうききんこふんこふんこふんこふんこふん

夏十首

卯七

美空

布きくすう治れやうり乃かきねりりりりりりりりり

基家

ふんやうききんこふんこふんこふんこふんこふんこふん

家良

谷うききんこふんこふんこふんこふんこふんこふんこふん

融寛

さうなと家いりといふり一とぬ乃もふいふていふて家ていふ

居氏

卯乃花乃多をかくてそつ之の治とそつていふていふ

行家

まらぬたらあ一ぬ家とそつて布とそつていふて

家西

の花乃あふふらぬていふていふていふていふて

都云三音

實空

かゝりていふていふていふていふていふていふて

同

まらぬらひなけや五月の所いふていふていふて

同

あつていふ

ふいふ事つていふていふていふていふていふて

基家

里いぬていふていふていふていふていふていふて

同

いふていふていふていふていふていふていふて

同

暁がさういふていふていふていふていふていふて

家良

わらうふすもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

志のひ神をたはまをせと部をたはねるうもはれらる

同

名残すもまふあまりに部を又ゆかへとたねるし家

融覚

あふらねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

部をたはねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

まうらねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

為成

あふらねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

うもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

あふらねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

行家

あふらねるうもつちをさうりあふらねたふらねる目もさう

同

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

同

日よかりては世の中はまじき事なり

東西

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

同

^{新夜}あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

同

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

實直

五月

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

基家

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

家良

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

あ

融覚

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

為氏

あはれおかしき世の中を渡るはまじき事なり

行家

友の輩乃々やまじくはなれし所らも
あはれし心ぞもよみ

兼西

見よそを成りたれは
あはれし心ぞもよみ

五月雨二首

實空

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

同

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

基家

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

同

山風乃々やまじくはなれし所らも
あはれし心ぞもよみ

家良

おらん

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

同

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

融覚

大井川をよみ
あはれし心ぞもよみ

同

あはれし心ぞもよみ
あはれし心ぞもよみ

為氏

伊勢乃あまれむけりきよの松家とてなほなむた

同

うらやまよらぬは流しに孫よりなほなむた

行家

行人乃まじけりきよの松家とてなほなむた

同

いふふれりなほなむたの松家とてなほなむた

兼西

みらの乃まじけりきよの松家とてなほなむた

同

^{初校}いふふれりなほなむたの松家とてなほなむた

兼

實定

月まじけりなほなむたの松家とてなほなむた

基家

いふふれりなほなむたの松家とてなほなむた

家良

いふふれりなほなむたの松家とてなほなむた

融覚

いふふれりなほなむたの松家とてなほなむた

あしあしからあしあしから

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

行家

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

率西

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

又立

実定

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

基家

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

家良

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

融覚

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

為成

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

行家

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

率西

あしあしからあしあしからあしあしからあしあしから

初涼

實定

水もゆるく木乃成乃若ひの秋のま

基家

又又の酒をたうとて

家良

みらまのり乃日影の夕陽の

融覚

まじり秋のそよ風

為氏

まじり秋のそよ風

行家

文のまじり

率西

津玉乃るふらの雲

秋二十首

早秋

實定

秋のまじり

基家

そ乃かえり

家良

草乃らふよけいさなる露をまは神のけし秋の露

融覚

かうきり融とやまれと露乃わゆるまに秋の露

高氏

いほの原は秋は風乃吹く老をあさけ涼く暮

うらま

行家

いほの原は秋は風乃吹く老をあさけ涼く暮

津西

あふれずり老の世をこころを今年にまじり秋の露

實道

七文

代へまゝふくまひ七文の世は家のたはる秋を

基家

かゝるまゝに風をまはるるかみらるる秋の露

家良

織女乃あせの川乃やう守れそよとこを毎をえ

融覚

久さ乃言井をけうまをら流一葉の行合の秋も

高氏

七文乃あまをりま秋のひまをうまをらるる秋の露

行家

減世乃を修りさるる林乃もひねりひさしく可樂なる

来西

年いなりしく一巻をれんことと又た愛たためせぬ林乃来より

七支修刻

貫空

かつせいのよりとせうれ中絶の修りれまはつた

基家

あけのつらう煙や屋舎乃を乃わしのねまひぬん

家良

林乃よきのうも乃の修りこと何れと又たぬまを修り

軸寛

あけの修りまは川系乃林乃を七支修り乃神乃修り

為成

まことり笑乃何れみたらつらき井乃より無修り

行家

わが修りよ書を修りぬんひとまはけとぬぬ出分らとぬ

来西

いふけら修りわさ修り何れ天のつらみらぬまはひせよ

露

美直

つらぬより来乃花乃林乃修りつらぬ野乃修り

基家

治一ゆりゆりあまのまゝにたゞ〜
家良

家良
おぼれ

あまのまゝ秋乃夕乃日露はまの神よりひきこみをせん

融覚

新
まゝく乃海〜まゝあけ衣秋を露乃花とてんは

為氏

色くまうはりん毛文城世の花乃ちまの秋也〜露

行家

まのまゝ露を花の中〜まゝまをまゝと乃秋の夕乃

年西

葉村のあまの露乃をまゝとてんまのまゝとてん中露

萩

實空

山里まゝまのまゝの露をまゝとてんまのまゝとてん

基家

露乃よ神よりまをむ秋萩のひと花乃るまぬくとも

家良

まゝのあまのまゝとてんまのまゝとてん秋乃るまぬくとも

融覚

秋萩乃にちり花乃るまぬくとも秋乃るまぬくとも

為氏

秋萩のほろりよりのまゝを人乃神つゝあるもあつたまを

行歌

おれと又夜よふ夜よこもき原の如くは萩乃まきしを神

津西

萩乃花よりなをれをたをたをまきまきまきまきまきまき

萩

實定

おれの家よ風よ花のまきをまきまきまきまきまきまき

基家

萩乃まきよひししの家風まきまきまきまきまきまき

家良

おれの家よ秋風よるまきまきまきまきまきまきまき

融寛

おれの家よまきまきまきまきまきまきまきまきまき

為成

萩乃家よまきまきまきまきまきまきまきまきまき

乃家

まきまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき

実定

我家よ萩のまきまきまきまきまきまきまきまきまき

薄

實定

後 後人乃家母と云ふはかよひに神なるはともは林内をゆく

基家

秋乃聖なるは神のまはちくはるまはともは林内をゆく

家良

今こそは神のまはちくはるまはともは林内をゆく

融是

也は神のまはちくはるまはともは林内をゆく

為家

かのまはちくはるまはともは林内をゆく

行家

かよひに神なるはともは林内をゆく

津西

もろは神のまはちくはるまはともは林内をゆく

虫

貫宜

は神のまはちくはるまはともは林内をゆく

基家

かよひに神なるはともは林内をゆく

家良

あふら系松虫のねもはちくはるまはともは林内をゆく

融是

in the morning by the first train from London

為氏

the first train from London to the first train

first

行家

the first train from London to the first train
in the morning

津馬

the first train from London to the first train

發者

麻

實宜

the first train from London to the first train

基家

the first train from London to the first train

家良

the first train from London to the first train

軸足

the first train from London to the first train

為氏

the first train from London to the first train

為氏

行家

the first train from London to the first train

津馬

書ふはあひかたに降るるに似たりけり
初雁 實宜

坊方こそ見えぬをた村言ふはうらな
基家

おちた言ふはまはひまふまよふ心
家良

春の心はうきまふはつる物なるは
融是

さげしはまはひまふはつる物なるは
若氏

今より乃高りけり秋風よきと
初秋

あつた言ふはまはひまふはつる物なるは
実西

あつた言ふはまはひまふはつる物なるは
月書 實宜

あつた言ふはまはひまふはつる物なるは
同

あつた言ふはまはひまふはつる物なるは
同

久しうあまのりこたに開きつらむまのの乾きせん

同

まじり我を津をさるるにむかひの神をさる

同

老をて身をもさけしもの月もさうりるるさ

基業

月影の星も清くみかかするるにれは清さる後

同

かみ家母のものさるるにほしたるもよるる

同

さしてさるるに清くもはるるさるるに清くもはるる

同

あはれもさるるに清くもはるるに清くもはるる

同

あはれもさるるに清くもはるるに清くもはるる

家良

あはれもさるるに清くもはるるに清くもはるる

同

枯風乃露次とあはれのまよひもさるるに清くもはるる

同

み先耳くこのはにせぬ海も老く一馬方枯れ老る

同

春まじりぬい田のかりて秋風よとまらぬまの目も老る

同

こもきくはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

融気

秋風乃言吹らぬまの目も老る

同

くものちまきくはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

同

あつらふはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

同

はなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

同

あつらふはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

落氏

あつらふはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

同

あつらふはなをみぬらうも老く一馬方枯れ老る

同

同

はるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

行家

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

行家

同

あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに
あつたはるかにさかすかしたるに

同

口くはなをらりてはなをくもくはなをの
けい

同

ゆきくも月をも解せり神の露さかきけり
ま

同

うらまはりのものもなまされし月もあまを
ま

栞夜

實定

厚心

うたふも里乃もふりもあけし急な家あまを
ま

基家

あま乃きんあつたる家のうまにあしあまを
ま

家良

目にそくまにこまは秋風よなをもたす
ま

融光

あまの秋風ひらけあまをたれおそ
ま

為氏

あま乃より里人のあまもあまをま
ま

行家

あまのあまをたれおそあまを
ま

奉也

あまのあまをたれおそあまを
ま

霧

實宣

朝後明けをみちしうもまよほせきくし書かざるまえに

基家

又目んかふしこむしひまじつがごとく林乃川なり

家良

まじつ日影のこゝれ海にさふかかたけの響

融光

船中舟風のこゝれ夜ふけにけしき秋の響

若氏

栞書しきれひさやふたつあふゆきに秋の

夕家

雲のなかに波のうねりこゝれこゝれを舟の音

幸也

深き道の舟かきしそしり花を舟もがけの春

松葉音

實宣

たそがれふりぬる雨を舟の音は日のあけまをひん

同

夕侍のひらけりし春の音まじりてうらなふ音

基家

舟のなかに舟の音をみちの舟の音は

同

お葉ののしを先づくも落しつゝも海女のあしりせり

書林

實空

うそたはまら先見しはりの書林のあそびをうそ

基家

おのこを并のたふぬ沖波をよそをちひうく枯色り鏡

家良

ゆく秋はあひの白せん立白燈お葉のあそびをうそ

融是

よふ家とあひのあつたるえとてあそび秋のあそびをうそ

為氏

ゆく秋の風ははげたもあつたるあそびをうそ

行家

ゆく秋乃あそびりあつたるあそびをうそ

弟也

あそびをうそあつたるあそびをうそ

冬十首

初冬

實空

とねり物あそびりあつたるあそびをうそ

基家

わしにえの後の夜をかくるしと神小法師の秋はさる

家良

ふそくもあつたの記をきつてあつたよき物をもつた

融光

新後
あつたものがあつた目よりあつたはあつたあつたあつたあつた

為氏

いかにあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

行家

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

希如

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

實空

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

基家

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

家良

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

融光

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

為氏

融雪

うらつげにくもりもあはす神無月冬のこととふ時雨かな
ふりふらぬ甲の手とは夕時雨むらゝくもる室にこそしか 行家
冬はきぬ時雨は袖にけしひひめあけかゝるる神無月時と 寂西

落葉 二首

秋せめと移るひそや一宿山木の草ふるまてちりにけらるる 實定

大井何秋のなごりと尋ねは入江の水にまつこもみず葉 同

世とはみなけてこももめとらつしりて残る枝なく木の葉とびと 基家

木がらもいせりさやまらそは足りのなをたごなたの冬のもみず葉 同

神無月木のはのしろきたぐわかにあとしとふるわな流から 家良

神ないの山の木ならしふらぬ日も時雨にしうらむる融雪かな 同

さらけつる融雪へあときすすためめはあはるの木のはらけり融雪 同

あはるの木のはらけり融雪
あはるの木のはらけり融雪
あはるの木のはらけり融雪
あはるの木のはらけり融雪
あはるの木のはらけり融雪

松乃原の時冬のそとのひそやとまてちりにけらるる

同

今もやこの葉がらけりつらむら神無月川冬に集は

冬二月

實定

冬さびに流るるの葉はにさるるもはらひなり也や

基家

月影のひらけりあはるの葉とよなるあはるあはるいん

家良

あはるの葉がらけりつらむら神無月川冬に集は

融雪

今より此書よりそよりそ^融覚

續本

おまゝの杜のそよのそよよりそよのそよ松乃風

同

神皇正統記よりそよのそよのそよのそよのそよ

行家

流石のそよのそよのそよのそよのそよのそよ

同

系文のそよのそよのそよのそよのそよのそよ

病也

松乃原のそよのそよのそよのそよのそよのそよ

同

今よりこの書よりそよのそよのそよのそよのそよ

冬月

實定

冬月 松乃原のそよのそよのそよのそよのそよ

基家

日影のそよのそよのそよのそよのそよのそよ

家良

今よりこの書よりそよのそよのそよのそよのそよ

融是

あしひのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

扇氏

あひひ

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

行家

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

弟也

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

寝

寶空

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

基家

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

家良

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

融光

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

扇氏

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

行家

あまのつらふらふまはし代りやうきをあらうりやうき

弟也

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

書三首

實空

なまらふのこころのまじりあつてのまじり

同

誠とてまじりあつてのまじりあつてのまじり

同

まじりあつてのまじりあつてのまじり

基家

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

同

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

同

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

家良

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

同

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

同

いんりくさくろくはしあつともはまゆりさく格の要り

融之

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

あつたはるの事なるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

いふにふしむるは物なるの首領乃日たはるの事

同

予の君の孫りたりと云ふ者ありて言はれし言ふは

同

と云ふは世に一時の事なりて言ふは言ふは

歳言

實定

かゝる言ふは言ふは言ふは言ふは言ふは

基家

たは世に世に世に世に世に世に世に世に

家良

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

融え

さうあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

為氏

年々あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

行家

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

定也

さうあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

徳二十首

初巻

寶寛

あせをなまこみんをぬま回惟袖志のれそは海にひら

基永

まよふ心はなほかたへしとるをたて志まをいひてそをせん

家良

^{後拾}志をさしむるを御用するたふしをせんはぬをわたりて人を尊

融光

へしをぬるをなほとこふなよふ心ては志は公なるなり

為良

新板
今更に... 袖ぬ... 我... 札

行家

... 常也

... (w)

... 寶真堂

... 草

同

... 基家

基家

... 同

同

... 家良

家良

... 同

同

... 融光

融光

... 同

同

Handwritten cursive text, likely a continuation of a letter or document.

同

Handwritten cursive text.

結末

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

為氏

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

同

Handwritten cursive text.

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

歌

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

序

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

高麗國の神代卷の神代卷の神代卷

同

なまの種のいづるもかたじけなく人いづる見けん
家良

いづれ油のあつたてりていづれは有る月

後拾

魁元

あか路の有るこころもいづれも余はなれ
為氏

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

行家

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも
志後拾ぬれいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

序也

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

好鶴志

安貞堂

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

基家

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

家良

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

融元

いづれもいづれもいづれもいづれもいづれもいづれも

為氏

ちふ中一をいりりりわ田丹まよあわの海にりり舞

同

わはまらのわわいりりりりり水むすい海りあわいりり

同

中へいりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

家良

新夜玉

いりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

換拾

りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

舞りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

舞りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

舞りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

融光

舞りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

舞りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

同

西影とあまを中へ身にそへてくらゝ車の日くさくあん

同

あまはかよへんかたのうたのこり糸一床のあはれをあらん

同

あまはかよへんかたのうたのこり糸一床のあはれをあらん

年あ

おれ一せよ有てあへりやうらむ人よまのうたのあはれをあらん

同

くらねとあまの持来るといへばのうたのあはれをあらん

同

はらわらきとあまの持来るといへばのうたのあはれをあらん

同

あまはかよへんかたのうたのこり糸一床のあはれをあらん

同

^{挨拶}はらわらきとあまの持来るといへばのうたのあはれをあらん

忘恋 三首

實定

あまはかよへんかたのうたのこり糸一床のあはれをあらん

^{挨拶}

同

あまはかよへんかたのうたのこり糸一床のあはれをあらん

^{挨拶}

同

葉のぬき身小くうゆい絲の書のおのりいんから林の光

基成

いんから葉のぬき身小くうゆい絲の書のおのりいんから林の光

同

葉のぬき身小くうゆい絲の書のおのりいんから林の光

同

葉のぬき身小くうゆい絲の書のおのりいんから林の光

家良

葉のぬき身小くうゆい絲の書のおのりいんから林の光

同

あひるの糸ははらわたの糸のつむぎのつむぎのつむぎのつむぎ

同

あひるの糸ははらわたの糸のつむぎのつむぎのつむぎのつむぎ

融覚

あひるの糸ははらわたの糸のつむぎのつむぎのつむぎのつむぎ

同

あひるの糸ははらわたの糸のつむぎのつむぎのつむぎのつむぎ

同

あひるの糸ははらわたの糸のつむぎのつむぎのつむぎのつむぎ

為成

に流るるをまもるはれん今にいつくはいつくはよもつてかたきつて

同

築ききりてついでにわづらひしりていつくはいつくはよもつてかたきつて

同

ありけりてついでにわづらひしりていつくはいつくはよもつてかたきつて

行家

しつていつくはいつくはよもつてかたきつて

同

おほいなる業をいつくはいつくはよもつてかたきつて

同

おろり人の業をいつくはいつくはよもつてかたきつて

寂あ

にいつくはいつくはよもつてかたきつて

同

おろり人の業をいつくはいつくはよもつてかたきつて

同

おろり人の業をいつくはいつくはよもつてかたきつて

假意

実意

おろり人の業をいつくはいつくはよもつてかたきつて

基家

比尋常なるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
家良

あいに身うつらひれしとこなるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
融光

あつたひつらとほけしとこなるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
為氏

あつたひつらとほけしとこなるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
新秋

あつたひつらとほけしとこなるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
麻丸

きこよありて恨めはほとんをくれしよけは後のこふれぬか

雜二十首

曉

實空

びく今あるのいさねはえんか曉とつらむと千まかせ

基家

考くぬかうしつかとくなれぬ身は終てあそくつてあそんを

家良

あつたひつらとほけしとこなるしほけしとやす忍我方よりのありあけの毎がこれ曉
融光

融光

いづつと老る終えんとならぬとあはれはつた後しをさるもあそ
け

徳拾
鳥の舌を曉おしよまればひるまよはるるからひるまよとして

為氏

行家

わいらり子ぶらふもいよおれしとて曉かつと祢ぶらふなるん
年有

あやすまいはげ鳥のいひあまのほら来の能と
老

松

実宣

ふかそらるせくれいふまきあつしとららあつたあつていふ
基家

ふらまて枝うしとす松しぬいひまのあよりなりいん

家良

大井川よみいふあつたあつていふ入の松よみあつた

融光

むしとていふいふらりのあひし子のいふれたのゆめ

為氏

はましとていふ枝のいふねねやいふれいふあつていふ

行家

それふとてあつていふれいんをとの松それとていふあつたあつた

年有

いふにわらまよとの松しんゆめけいふも子とていふ
あつた

竹

実空

とくしんやむのみにつらつら行ふ代かへく人無ん
基家

やいひしかりよあひいしおの川乃人の意や若の
家良

呉竹のすゑ乃よまきいたれいもむくたぶら今
融兌

物日新ういさうんひいひのこれ代もやうよと松かねん
為氏

これ竹乃身のいぬいぬのあしよ代乃かへくあひい
為氏

行家

みよりなる竹乃んその一斗よあましんいひのあけそ
寐あ

これ竹乃と枝かくれのみましをれあひてとらぬ取と
實空

新故
あつとむいぬのいぬいぬのあひてとらぬ取と
基家

さく人とも家人もなまいひいひいひいひいひいひいひ
家良

いふれ花もあましあつとらぬのいぬいぬいひいひいひいひいひ

融元

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

為氏

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

新家

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

新家

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

何

實空

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

基家

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

家良

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

融元

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

為氏

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

行家

この本家の初めは、この年ありて、新代に、この本家の初め

床の

大井川がせきしの石とまうしあしりのわくはあはれ

橋

實定

まつらうの橋は折より身うらむる

基家

おはしりまのりてはれ橋ちりまはれわう

家良

たまたまのりてはれ橋ちりまはれわう

融光

まつらうの橋は折より身うらむる

為氏

ありまのりてはれ橋ちりまはれわう

行家

いふいふのりてはれ橋ちりまはれわう

宗の

あふとれくもてはれ橋ちりまはれわう

岡

實定

いふいふのりてはれ橋ちりまはれわう

基家

ほのろくもてはれ橋ちりまはれわう

同

あつては列せしむるに月をわたりてあつてはけり
融えん

都は一日とあつてはけりもあつてはけり
世にけり

同

あつてはけりあつてはけりあつてはけり
為氏

同

あつてはけりあつてはけりあつてはけり
あつてはけり

行家

同

あつてはけりあつてはけりあつてはけり
けり

定あ

同

あつてはけりあつてはけりあつてはけり
あつてはけり

海路

實定

あつてはけりあつてはけりあつてはけり
あつてはけり

基家

狭古
松平の入海してあすけのみやうすの年す秋の志

家良

玉
わいの茶の一本はしとらんいづくはの井たのり

融光

あがしりるるいんあしあから海とらんいん

為氏

浦波のたのりしはなをいぬ焼ゆしはなをいぬ

乃家

明のりもた放まに年いあていんあ月と海はま

孫丸

月をえして海りハせいしあせいハあわはらハあてい

山家 二首

實定

け

いんいん井らんハ年ふれいもみえあわあ成家せり

同

あふれいあふれいんあふれいん文人にふれあふれいん

基家

月いんいんあふれいんあふれいんあふれいんあふれいん

同

いんいんあふれいんあふれいんあふれいんあふれいん

家良

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

融光

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

為氏

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

乃家

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

年あり

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

あはれなる花の香はるかにさくらさくらと

同

のからん身ぶあわねころし井心あわひゆらちん

懐旧

寶貞堂

何ゆをそれはらぬのこをれはらぬのこをれはらぬのこ

基家

大さうじいふよめいれを我ら世ころまに新乳

家良

いそお志のふらうあさうんまことあめいしあめ

融光

るし事のためあまよたかゆ只縁と光のからる者

為氏

福りり月日にほびてあなまううわつあ世にれい

初家

され我いほいころれあつたれにわあまのこを

宗あ

いあへよあわひいし板るよりあんの月と縁えよ

夏

寶貞堂

わら甲よ首をさうしとかりも受てふあう海とをりける

基家

いあへの雲いぬみふけたなわさちの夏語なるん

家良

まともにもたれぬのこれにさうもあつてもあつても
うらやま

融光

さうかとうつていふ心もあつてもあつても
わかれ

為氏

んともメーのいひははしてさうもあつてもあつても
あつても

行家

あつてもの戦れ中にある身さうあつてもあつても
あつても

年西

あつても枕のうらやまあつてもあつてもあつても
あつても

祚祇

實空

あつてもはなのあつてもいほの流松の流れとあつても

基家

代のあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても

家良

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
あつても

融光

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
あつても

為氏

あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつても
あつても

行家

所や世々の世川を流れて今も見えぬがものたじ

摩西

やをよるけいけいともやうつとも名流のふたてもあつて

釋教

實空

こころけいけいのふともあつてこころけいけいの井泉

基家

小一の海らひひくあかよまをせつわきこころけいのふた

家良

あつてこころけいけいのふともあつてこころけいの井泉

融元

十海こころけいの水もまじりのいふゆよこころけいのふた

為氏

をへい家法のあつてこころけいのふともあつてこころけいの

の家

そふとそれけいけいのふともあつてこころけいのふた

家お

わつこころけいのふともあつてこころけいのふた

祝

實空

あつてこころけいのふともあつてこころけいのふた

基家

海のほとけにあらまほしき代よりかへりて

家良

非風や日非れ文のよきしらふとて

融光

龜の尾にほのめぬ文はくちりて

為氏

北の風のまろきとありてわすれりて

行家

ふとてはなまよふてのたのしみとて

舞あ

残るの代とありてよき代よりかへり



白河殿七百首 文永二年 當座七百首
仙洞七夕御會 於禪林寺殿被行之

作者

御製 後嵯峨院

前左大臣實雄 号洞院

民部卿入道為家

五條前大納言資季 正位法名心号平松正應
二逝從三位資家男

新大納言顯朝 号景室

皇右宮大夫師繼 花院內大臣位在顯朝上

侍從中納言為氏 二奈家

五首 春十五夏五秋十一
冬四 一雜六

六首 春十一夏一秋五
冬三 一雜六

七首 春十六夏四秋九
冬十一 一雜十六

四首 春五夏三秋三
冬三 一雜十一

四十五首 春九夏四秋八
冬五 一雜十一

六首 春七夏四秋四
冬三 一雜七

百十四首 春十九夏一秋廿一
冬十二 一雜廿四

源宰相資平 正位按察中納言弘安七逝

後三位行家 正位參木頭平男 從三位九京大夫号九余建治元年卒

右兵衛督教 從三位如家男 從二位昆法門堂法名明心弘安二年卒 奈家為家三男

富小路三位中將云雄 又号小倉中納言

雅言朝臣 正位大納言正和逝 中納言雅具男

忠繼朝臣 參議從三位法名了惠建治三年卒 雅繼公男

具氏朝臣 參議從三位源建治元年卒

經任 正位通氏男 正位大納言中地門永仁逝

真觀 正位中納言為經三男 右大弁入道光俊

禪信 侍從入道

範忠朝臣

重名朝臣

資有

賢阿伊賀入道

右細字私考之

出題

題者

民部卿入道為家 春百三十首 戀百五十首

侍從三位行家 夏七十首 冬七十首

廿七首 春三五秋三 冬三五雜八

廿七首 春四夏四秋四 冬四十三雜八

十五首 春三五秋六 冬四夏四雜四

十首 春二夏五秋二 冬三五雜一

廿七首 春五夏三秋六 冬三五四雜六

廿三首 春二夏三秋四 冬三五雜四

廿八首 春八夏秋七 冬四夏一雜四

廿首 春三五秋六 冬二夏四雜

四十五首 春六夏八秋九 冬三十三雜六

十五首 春二夏三秋一 冬三五雜七

十四首 春一夏三秋七 冬二夏三雜一

七首 春四夏秋二 冬一夏一雜一

八首 春二夏三秋二 冬一夏一雜三

十五首 春二夏三秋二 冬三五雜三

真觀 光俊道

秋百十首
雜百十首

文永二年七月七日於白河殿當座御會也

題

春百十首

年中春

宮初春

初春

子目祝言

子目松

山霞

野

閑

雲

栢

澗

波

湖

海

濱

舊巢言

雪中

竹

寢覺

夕

春冰

野若菜

原

次

水邊

殘雪

餘寒風

二月餘寒

依風知梅

里梅

簷

古宅

梅薰栢

暗夜梅

梅後水

梅香留袖

梅浮潤水

梅落衣

柳露

門柳

行路

柳靡風

河柳

栢色

田邊

春夕月

春車

春曉

古公亭

浦

連雲

幽

松似字

峯

海

待苑

為一 栽一 初一 見一
翫一 史一 花忘老 折花
頭揮花 曉一 朝一 夕一
夜一 花史松 竹間花 花似雲
花留人 花下忘返 倚花誇人 花未飽
紫極 八重一 禁中一 社以花
古寺一 山家一 閑居一 志煖花園
山花 嶺一 溪一 罌一
野一 里一 杜 林一
開一 池邊 雲間一 霞中一

月前一 西後一 夕一 庭一
漱一 落毛如雪 苔上落花惜花
殘一 初春雨 居一 梅一
春晴 山窗蘭代 河色一 路一
野草 庭萱 松下躑躅鳴歎冬
河歎冬 夕一 里一 蘇一
松友 池一 夕一 居一
浦一 蕙惜春 喜欲言 惜春不留
三月盡夕 三月春末

友七十

其交物

杜其交

谷餘苑

居外苑

籬外苑

外苑感

待郭云

初

聞

郭云

曉郭云

曙

朝

夕

車

雲外

月前

雨中

郭云

山郭云

里郭云

後

開

雲

原

郭云

盧橋初開盧橋薰風

吉鄰盧橋

沼葛浦

池

前

簷

袖上

田家早苗

急

嶺五月五

松

磯

湖

橋

舟中

浮

閑中

連日

五月雨欲晴

寢覺水鷄深衣鶴河

水橋川

遠村蛟遣大

庭交子

鳴

水

隣翟麥

翟麥帶露行路久立

溪

野

名其交月

水色

交月似秋

樹陰蟬

秋色

叢端螢

螢之志

晚交螢

交車紛風

松下納涼

對泉避暑

河交枝

秋百十首

立秋曉

新秋句

物秋句

早涼句

山子秋田——待七夕織女契久二星適逢

海邊七夕野外——蕞中——七夕別

聞秋遠——近——山居——

墟——簷——秋驚馬夢女帝花夕

野亭女帝花沃——原秋惡——

行路秋——河邊——秋盛折秋

秋欲散籬薄——薄似袖——隨風

蘭——夕分橙——草花露——淡茅——

荳徑——朝——夕——袖上——

尋虫聲——玉聲滋——兩夜虫——虫怨

蠶思——秋夕雲——秋夕雨——秋夕風

閑中秋夕古渡——嶺鹿——溪——

私——麓——麓間——田家——

遙聞——鹿声何方——旅宿鹿——寢覺——

初——連雲——風前雁——雨中——蒲暮——

深更——雁作字——湖上——溪畔——

葦邊——閑駒迎——待月——月出山

月契秋——藜祠月——蕭寺——禁中——

花洛——草菴——庭——遠鄉月

野居——閑屋——水——池上——

海路月

浦

破

濱

浮

江

池

崎

淤

指

月前遠海月前扁舟

月前行客

闲是月

獨對

无惜

擣衣幽

松下擣衣

連衣擣衣擣衣旆

擣衣到曉

山路菊

水边

菊久馥

遠村霧

霧隔帆

霧底棧

驛路霧

初

曙鷗

初紅葉

露深山葉

雨後紅葉

紅葉處

紅葉遍

松間紅葉

社

隣

紅葉誰家

映水

秋徐暮

暮秋霜

故鄉秋蘭

鐘聲送秋

惜九月盡

冬七十首

山初

里時雨

時雨告冬

朝時雨

夕

時雨易過

杜時雨

嶺

閑

閑

旅宿

山家

落葉殘秋

落葉如雨

庭落葉

聞落葉

落葉不待風

冬田霜

野外霜

樵路

見殘菊

墻根寒草

澗寒草

江寒草

枯野菊

冬曉山

冬夕嵐

冬車雜曙

冰初結	水冰寒骨	倒水	汀
石間	海冬月	池	水
浦千鳥	六夜	音	池
獨步千鳥	為網代	霰殘夢	竹霰
鷹鳥狩日暮	巴邊鷹狩	初雪	淺
積雪	雪中望	雪埋松	依雪待人
雪似電	新中雪	遊日香深	深山雪
系	池底	淡色	活
鴻	巖	河鳥	水
祛	古	炭電烟	白炉火

歲暮近 家之歲暮

嘉正五年

寄天意	一月	一月	一星
一取	一風	一雪	一履
一霧	一露	一霜	一音
一愛	一時雨	一煙	一山
一炭	一松	一苔	一虫
一杜	一野	一系	一閑
一田	一里	一市	一河
一池	一江	一沼	一池

海	海	真木	藤	藻	苔
浦	汀	橋	松	管	拍
溪	橋	松	欒	葛	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵
溪	橋	松	欒	葵	葵

忍草	郭云	鷹	鷄	松	鹿	門	玉	箭	緒
忘草	水雞	千鳥	蛛	蜻蛉	柱	戶	笛	簾	絳
月草	鷄	山鳥	螢	屋	床	楹	筆	笠	鏡
鷺	鴨	鴛	蚕	窓	卷	庭	弓	蓑	錦

鐘	築	繩	筏	車	本綿	硯	排頭	釵	衣
貝	綱	宮	簫	舩	四手	筆	櫛	筵	絲
凍	答	泛	燈	檝	汪連	扇	匣	枕	布
	簫								
	凍	滅	細	碗	弦	繪	書	髮	帶

雜百五十首

社頭朝
 一 鷄
 春日
 一 瀧
 寂勝講
 原上行人
 山中遊女
 老人奉長
 曉遠情

暮
 一 暮
 祈年祭
 新葺
 一 路
 仁王會
 嶋漢客
 岸頭傀儡遊子越閑
 淨侶改言
 野行幸
 一 幽思
 許趨積年
 錢別欲奉
 神
 水
 石清水臨時
 賀茂
 古寺嵐
 鐘
 一 苔
 市高客
 隱士出
 山狩捕

眺望日暮

真遊未失

孤夢易覺

披書習

霽中春

朝

秋

冬

曉

朝

晝

夕

系

風

雨

煙

山

野

閑

河

霸中船

橋

衣

枕

名於山

野

思

林

村

里

閑

驛

田

流

河

堤

凌

津

海

濱

磯

崎

嶋

湖

山家春

復

秋

冬

曉

朝

夕

春

雲

返

風

枌

岩

水

盪

戶

嶽

鳥

經年

待人

窓竹

蒼忽草

路芝

澗草

思篠

岸忘年

巖裏門冬

河玉藻

沼葦

江菅

砌松

庭合歡

山椿

嶺桂

杉檜

杜松

思惟	芥蔕	濱楸	磯榿
寄金迷懷	玉	鏡	錦
一 鍊	一 布	一 衣	一 紬
一 枕	一 志	一 扇	一 燈
一 簾	一 弓	一 箭	一 琴
一 笛	一 車	一 舩	一 篋
寄天祝	一 日	一 月	一 星
一 雨	一 地	一 國	一 郡
一 都	一 道		

仙洞七夕御冷當座七百首 文永三年
於禪林寺殿被行之

春百三十首

年中之春

御製 後滋德院

初着こころさきもんりやせに二三しきりきりきりきり

初初言

同

後人の袖をつつ袖くまきりきりきりきりきり

初言風

かこころは風いやはきききききききききききききききき

子目祝言

車名部片

子目より松いもせと父の松葉を記るる変り

子月松

沖製

子月とて糸引をひく松糸また糸を引るよ

山霞

氏入道 融覚

山乃その名をなす志すも糸引る松糸の如

野霞

重名 邦臣

松糸神より糸引る松糸をなす母の如

雨霞

侍従 中納言 為氏

雲乃其の雲は神の如くも糸引る松糸の如

果霞

同

霞ひりし雲も糸引る松糸の如くも糸引る松

梅霞

融覚

雪乃海を霞くくも糸引る松糸の如くも糸引る松

龍霞

前丸府 実雄

水と雲は糸引る松糸の如くも糸引る松

渡霞

侍従 中納言

舟乃渡りし雲も糸引る松糸の如くも糸引る松

湖霞

範忠 邦臣 沖製

志乃浦も糸引る松糸の如くも糸引る松

海霞

沖製 為氏

久世乃海の塩も糸引る松糸の如くも糸引る松

漢霞

侍從中納言

叶は波きく一は漢の松の心運くく雲の霞の

高染書

新大納言 題別

新大納言の心こゝわがうさしはれやうのうの心も

雪中書

志継別

雪をてりぬき雪の心こゝに里いにたまはしる言は

竹書

赤宰相 資平

文くふ夜うさくまを言はゆは行よき風を

寝定書

侍從三位行家

まはる車乃の心運の言は行よきもうの心言の

夕書

新大納言

たふふよひとみを言の心運乃内よ日言の

春氷

鉦任

ま風もよひ心とみを言の心運乃内よ日言の

野居書

刑部

治るじ雪はもつて心火乃小也との心言の

厚衣書

雅言別

心あ乃袖なり心言の心運乃内よ日言の

浪書

沖製

うさくまの心運乃内よ日言の

水辺の葉

皇右宮大

花院内侍師繼

江の川野浪の志水不_神懸てあつひく春の紀ふる

残雪

皇右宮大

春日の葉緑ふとめれく_神在儀さきく雪はひ

餘寒風

皇右宮大

まよとも霞乃ま袖松がまよともまよとも風うれ

二月餘寒

具氏朝臣

今も霞乃衣まよとも松二月乃袖まよとも

依風急梅

三位中将云雄白

浪乃波乃三は乃松は毛墨はまよとも風うれ

里梅

具氏朝臣

咲ぬいとも乃そよめいさきもさきもさきも

笠簷梅

忠継朝臣

うしろ梅まよともさきまよとも春の記の

古宅梅

新右記言

梅うえ

風うけさきともさき梅乃花松はまよとも

梅葉花

真親

いさぎ新やりの梅の叶のふ袖今もさき

暗夜梅

資有

梅乃花まよともさきも_{子イ}圖乃秋ふたてまよとも

梅後水

新大納言

暖目より好むと云ふ中も梅は花のむすむすなり

梅香留袖

侍従三位

香のよもたつた梅の香あり流し風の

梅浮相水

冲製衣

若川乃と水と小梅の心ありと云ふ流し梅

梅落衣

侍従三位

ねれと神ありと云ふ梅は花あひと流し梅

柳露

源掌相

ぬきと柳ありと云ふ柳は花あひと流し梅

門柳

侍従中納言

春柳のよと花のあひと云ふ門柳は花あひと流し梅

行路柳

同

春風乃と花ありと云ふ花は花あひと流し梅

柳藤風

雅言朝臣藤信一

春風乃と花ありと云ふ花は花あひと流し梅

河柳

具氏朝臣

春河乃と花ありと云ふ花は花あひと流し梅

梅香柳

侍従中納言

春河乃と花ありと云ふ花は花あひと流し梅

田邊折

侍從中納言

冬より甲申の日の古柳を緑と金と小みえつ

春夕月

前大納言 賀季公

氷文見れば松葉やぬき雲はらまきと新く見れば

春春月

去秋

春の軒はさ言を待たばとそらりて空を月あり

春曉月

前大納言

詠ても吾所におまらるる衣のむすけのありはあはれ

春春月

融覚

心ひびききと首の月とさそはれおとまきとこのあはれ

浦春月

柳製

下るる花のぬき月ありとらうとてさすもこれ

帰雁連雲

前大納言

名残の雲とさすも一人の雲の余りたるはあはれ

帰雁幽

同

ゆかり霞乃と前大納言とさすも新く見れば

帰雁似字

雅言別信

うしと雲小とさすもこれぬき雲の余りたるはあはれ

春春月

前大納言

夕暮とさすもさるる花のぬき雲とさすもこれ居金

海帰雁

賢阿 伊奴入道

靴波浮海舟ちをよ敷く今まきとくつりす

待花

侍從中納言

霞じ目もむらさけく咲屋をく流るはさかしく見

尋花

同

待より心成てもろく今まきとくつりす

裁花

融覚

ふきとめくさき母ふもまはせり侍

初花

禅信侍拉直

ふりりくは梅咲とてははるをよとくつりす

見花

右兵衛督 后教

春もいあさるまてしは梅もよふもあはる

既花

侍從三位

花の又あはるまてしは梅もよふもあはる

更花

新大納言

若野のさかもつらむ都よりつらむと日記に

也忘老

前九府

花のくさるもさきまきあはるまてしは

折花

新大納言

あす風あすもさき梅もよふもあはる

頭挿花

融覚

多の又太夫人のきく花永く世にのけいさくはるかにいかに

曉花

御製

乞の又太夫人のきく花と云ふは、此の軍の也乃其書

朝花

融覚

約れく梅さ記は、吉野山をうり外は、おもしろ

夕花

前大納言

山雲乃朝も乃花は夕もふたふたを、あつらん

春花

前左府

夕も松さつらつら、いかにいかにいかにいかに

也更松

融覚

吉乃松よあはれ、いかにいかにいかにいかに

竹間花

室名宮太史

本はあつる葉は、いかにいかにいかにいかに

也似雲

侍従中納言

さうぬらり吉聖は、松西新各記ふたふた、いかにいかにいかに

也留人

真親

本は中よ、遠旅日数乃、いかにいかにいかにいかに

也下忘神

御製

いかにいかにいかにいかに、いかにいかにいかにいかに

伏見待人

前大納言

如人つらとんをなほ乃也たあやにほろとてさる

花束飽

雅言朝臣

そくふ彩り来るまきの又あそくも乃けふさむ

絲襪

皇右宮左史

河をらに記出寺に糸襪うへをれくをそびさむ

公室襪

侍從中納言

春乃目たえとまをい^{まのふ}に^{まのふ}登へ^{まのふ}に^{まのふ}襪ぬ

禁中襪

右宮左史

次乃目たえとまをい^{まのふ}に^{まのふ}登へ^{まのふ}に^{まのふ}襪ぬ

社頭靴

皇右宮左史

社乃目たえとまをい^{まのふ}に^{まのふ}登へ^{まのふ}に^{まのふ}襪ぬ

古寺靴

前大納言

初き尾よの襪うへりきまぬぬをぬぬぬ

山家靴

雅言朝臣

初き尾よの襪うへりきまぬぬをぬぬぬ

閑飛靴

侍從中納言

初き尾よの襪うへりきまぬぬをぬぬぬ

志賀七園

同

志賀七園

山花

同

高松の苑の松乃色を今も見せしむる山松の

松花

経任

山松の苑の松乃色を今も見せしむる山松の

溪花

新太郎言

著る松谷張るる松を今も見せしむる

松花

融覚

松の苑の松乃色を今も見せしむる

野花

中製

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

黒屯

具氏朝臣

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

松花

新太郎言

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

林花

融覚

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

関花

具氏朝臣

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

池邊花

新太郎言

高松の苑の松乃色を今も見せしむる

雲間花

皇右大臣

あふとも名ふとそとれ花乃雲後うし中記のわらひ

霞中花

中制家

高の次也然るもすたふとれ霞を息まふ乃あまほ

月あ花

経任

春乃月すめり新の後うし中記のわらひ

雨後花

侍從中記言

まよふとぬれはれて是のいふのこをせむあつて

水上花

融覚

春うづびつる目新も采乃也のあつてはるにそを

庭花

侍從中記言

春代庭花は風乃とふとあつてはるにそを

露花

融覚

石乃露つとあつてはるにそを

落葉如雪

皇右宮大夫

あつてもあつてもはるにそを

苔上落葉

融覚

苔の上の落葉の通流してはるにそを

惜花

具氏朝臣

いふなりとあつてはるにそを

残花

融寛

个れぬを極がののらむはを誰か尋ねてもえ

朝春雨

侍臣中紀言

晴屋をくもむとれと物産をあらはせむとて

唐春雨

具氏朝臣

今とぬを乃唐にやれ目小糸とてとてとて

唐春雨

三位中将

今より物乃とてとてとてとてとてとて

唐曙

具氏朝臣

今より物乃とてとてとてとてとてとて

山苗代

資有

吾乃とてとてとてとてとてとてとて

河色苗代

賢阿

山城乃井の河水を記し山苗代とてとて

路苗代

名名物

とてとてとてとてとてとてとてとて

野草

真親

海茅の山の野の志あるも取りとてとて

庭草

雅言朝臣

数るぬまに小咲らつ不至の事所をさす

松下郷躅

沖制表

嘆きよ山のついで心乃文をいふ此松よんてさふ

嶋歎冬

去歎

嘆息小清り記乃山を也十比への所如ん

河歎冬

融冬

仍まをいとるらん此の心を多の井より

夕歎冬

沖制表

くれぬとをさふ小とんたにぬみすの心さふ

里歎冬

右岸湯符

里に名いともある一里一たふよ此の心さふ

籬歎冬

融冬

行きもよるよふととと中らんを色乃山々の花

松友

侍長中納言

君の松の心せよ多の心はさふと一はは松

比友

前左尉

嘆き多松の縁よ多とく度入る此の心さふ

夕藤

新五納言

尋きついで田乃松乃名乃心ある事よ小日言

岸藤

源宰相

よれとて神とてなれ流つせはる心さふ

此河乃きし印花咲けりよをくらぬめくさる

籬印花

融之

印花乃色雲の流くそめわり月の影をいし後

印花盛

侍従三位

人もと咲や印花の心さりこそよ知らぬのさる

待郭云

去秋

時多のめてふもつまぬく美よりけり松のしほ

初郭云

忠継朝臣

よもりのたやと花時多の心さるこそ初春のしほ

次郭云

去秋

たせり承くふきとん杜鵑の泣も花のさる

郭云發

范忠郭

郭をよ發れ名流ふそ乃らるこに花さるわら

曉郭云

三位中将

待人もふせよとらほくもよのりもそこに花さる

曙郭云

右幸進

ゆわらる花乃枝をさるこに花もはれぬ花さる

初郭云

同

東のくまそとつまねる子親をいし花さる

次郭云

深室相

とありやま乃推察志ういふ事とて此の時も

原部云

右筆兼判

けされい

こゝをば今も此の部云はるの事村多乃

部云稀

三位中将

今又初着る種の時多れは此の事

盧楷初用

冲製

昔乃句ときけいこの中れとてさひきり朝の立花

盧楷芝風

乾忠初用

経取のめと近く此の事取も与る事とて

右の盧楷

三位中納

乞や又^{けい}楷一打を此の部とて此の部とて

沿高浦

資有

今もぬらふ沿たあやめ取乃引を根に浮小ける

比高浦

融定具氏

水いねをぬりふ引くあやめ取も此の部とて

芹高浦

具氏初下

美つゝとて由ふとせあやめ取も此の部とて

麓高浦

雅言初下

山乃乃行の事いりまうつゝあやめ取も此の部

社上高浦

経任

中一りし五月の豫のとき長は秋小鳥あまきさうれ

田家早苗

新古記言

存道さたりて水とを記今く門田七早苗と云はれ

急早苗

待延三位

ふろこと急くや苗よれもなほく奇なるは雲哉

只五月雨

皇名文書

雲少^ひたさすれ推察志くく^と雲とを記せむと云はれ

松五月雨

同

目ふと水もろくは松川ふあまをさす存ぬのは

儀五月返

侍延三位

恒さぬ近は乃海も五月返ふあら返とまらはれ

湖五月返

靴貫

鏡山ふふふさすさ浪よ雲もかりあは存ぬは

櫛五月返

云親

うふも神やかりん五月返まらくはるあさ水の櫛

船中存返

月

あふと後乃素に神を建くは神とさるは存ぬは

馬五月返

市左記を

湊川と記し目ともかりなり水満なりは五月返のは

雨中五月返

沖製衣

藝をふしとてと紅糸椅子にけりたあう此と此をう紀

瞿麦帯露

志继物言

とこ文七花乃田露のすくふとわやあゆみん

行路夕立

三位中将

夕立を市もやうるおほくろたれしそ

湊夕立

侍従中納言

沖は浪を吹く垣風乃湊よるぬるらむ

野夕立

侍従三位

夕立のまはれ風よ露落るるも涼いあまのそ

名雨夕立

雅言物言

待出り月をまうと河音も涼いとあふらと風

水辺夕立

具氏物言

うら書のき間乃水にけりしそむのむら

五月似秋

融光

明中と記書のまきうす月影を秋はそよひ深ま

樹陰蟬

侍従中納言

空蟬乃身をほ小祢をさる志記本張のまはる

露邊蟬

同

露多記露のひまに歩とるう下こむ蟬の夜

叢踏蟬

市左記云

日をいつくや夜更けの村をさぐるはと云ふ
雲過窓
侍従三位皇太子

今も昔にもよきよりれり量りたぬ意を云ふ
晩交雲
侍従中納言

秋風も雲井をこよみ
交在待風
お大納言

五月毎の晴けに
松下納涼
同

夕附日くぬ曇乃松陰
對永避暑
融光

よよ孫心泉乃水北

河交後

御製

河辺るりわたりしは

秋百三十首

立秋曉

皇居宮大夫

御後しく世も何事秋の夜曉りけて解らざるを

新秋夜

経任

寝もて世目とわらぬ秋ふあさくまのこの久し海に

初秋風

新大綱云

萩乃くはいふもあはれ秋の夜曉りけて解らざるを

早涼玉

融之

うはゆか解きぬらんうた秋の夜曉りけて解らざるを

山早秋

古記

凡の暮れゆく乃言はるる秋の夜曉りけて解らざるを

四早秋

新大御言

いよもよとまらみん門田のり家はる秋はくしり
待七夕 同

天河わの海んとさふりりあは海神そわを社れ
織女弁久 沖製衣

七夕わまのね衣いもそつさあやあひりま
二星適逢 新大御言

先星つまびらみいりて神道と遊水と海はあは
海辺七夕 去親

いまあふも天河あふはるえと春原あは星合
野外七夕 おた府

星合のさるあはうらるんかあのこはく 天は河^水うらん

霧中七夕

侍后中御言

七夕わあふあふもあはれ一乗斗此月一様寝よ

七夕別

去氣侍

あふまたあは笑をねあそ別はる一星合乃う座

同萩

侍后中御言

あふあは疾は萩原さそく凡のこ秋乃夕うれはる

遠萩

賢阿

あふあは萩乃こもくきすした信原あ凡うらん

近萩

侍后中御言

あふあはのこは秋風さそく松ありく座のあはる

山形萩

おた府

とれとるに草に海川あり山室に凡ゆるるるに在れ萩原

佳萩

去萩

後とるに人々をいんもやとのまはりしき萩原とを

菅萩

侍従中納言

界をく行はれ萩のたよりありていふも萩のこ

萩敬篤三

御製

うてはれぬえらぬ萩のこ萩原とをいふも萩のこ

中納言

侍従中納言

わらわらに萩原とをいふも萩原とをいふも萩のこ

野亭中納言

融亮

唐詩よみて秋に萩のこ萩原とをいふも萩のこ

澤中納言

忠継朝臣

面萩とていふも萩のこ萩原とをいふも萩のこ

東萩

同

嘆とる文よ萩のこ萩原とをいふも萩のこ

愚萩

新大方御言

旅人の萩より萩のこ萩原とをいふも萩のこ

汗路萩

雅言御下

や萩よりいふも萩のこ萩原とをいふも萩のこ

河辺萩

七氣造

萩とる文よ萩のこ萩原とをいふも萩のこ

蘇威

具氏御

魚くさる魚小虫より蘇花今や蘇と人たす

折蘇

侍後中御

うは海らんをと志す深初蘇よゆきてわげり秋蘇の花

蘇欲散

同

初らそと蘇初らんをと此ひね分よしら秋蘇の花

蘇為

皇后より

白鳥乃庭と色と蘇散て為とてうん秋をそや

為仙神

侍後中御

白鳥乃庭と色と蘇散て為とてうん秋をそや

為隨凡

同

一方にひふよりりね花も穴草花中と蘇花出る

蘭葉枕

三位中御

ねを於いたる石花そ蘇花蘇花柳しはゆりらん

戶外槿

侍後中御

山のの葉れきたんハルカク蘇花と蘇花の花

草花為

同

たゆましのりそ蘇花とて尾花よまふ蘇花蘇花

沙芽蘇

賀負有

風よま蘇花蘇花と蘇花と蘇花の蘇花

苔徑露

雅言御

物訓記たる蘇花と蘇花と蘇花と蘇花と蘇花

物為

具氏物下

物毎々もまたもつる危もなき事なれば未だ病乃るを
夕露

新大御云

神より秋の夕露とてもまたもつる危もなき事なれば未だ病乃るを
社上露

侍従中御云

今も夕露もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
為虫声

花志物下

為虫声もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
虫智後

志規

たにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
為虫出

雅言明臣

秋と今更の秋もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを

虫怨

深宰相

山陰の夕露もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
春思

侍従中御云

春思もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
秋夕雲

融覚

秋夕雲もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
秋夕風

侍従中御云

秋夕風もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを
秋夕凡

賢阿

秋夕凡もたにわらぬあ神も病乃るを未だ病乃るを

田中秋夕

去規

少なきく子に居るれと今文に後言す秋の物言

古渡秋夕

同

老しゆく竹のこゝろ酒を只此酒に秋の物言

鹿鹿

中製

夕言ひとく此山の花つと鹿も家よき人ぬ息れ

漢鹿

融覚

昔ゆくさひ入てくる鹿がけし聲も其妻やふり年

松鹿

具氏作

ふみ川より此松よ鹿の聲ひつたてなく妻やふり年

麓鹿

融覚

小倉山甲の鹿の姿今けの光の跡えもねとく言

藪間鹿

經任

さどくれよなふり秋の神多しきけとに妻やふり

田家鹿

侍臣中物言

房は田もれ鹿凡のうよ鹿のひ迎に秋乃山里ウ

送す鹿

所製

わじ山凡よすてすけとく中ひのをれとくし鹿

鹿声何方

侍臣中物言

秋凡のつそいさくら鹿のひつらとくさつとく言

旅宿鹿

融覚

今春も鹿のまきふりやとけハ初めやふり言

寝覚鹿

右兵衛督

うそくたに秘之の祿の宗の宗之何と危上鹿の鳴ん

初雁連雲

侍従之位

きくくよまれとそ村雲の初雁に鳴ん

凡初雁

具氏御下

望と今秋風吹とつまけんといふも雁たなきにけし

雨中雁

侍従中御之

天原秋をとんとつり此はとそあけをけふもれのため

為善雁

辨大御之

散り浅く立とも来れ絶ゆるり入目守望雁のさけり

深更雁

経任

小東の海柳のよまきててま弁たりのつらけり後

雁他字

同

あましともをさやうとあつとあつとねる秋のり子

湖上雁

侍従之位

侍従中御之

鳴れ海やるれ水たよみたなやかくともは雁た玉はさ

湊畔雁

侍従中御言

為中御

ふり舟れ湊とる舟漕舟れ舟と舟あくる秋のり全

葦舟雁

源宰相

並舟れ玉川の芦よみかくれてともまむれから秋のり全

用約連

具氏御下

舟より絶ぬ多るうい道夜の用のみまに約ひき

初月

侍位中御之

物之始と云ふ所を御山に云ふは此の初月

月出山

侍位

山のふたのふくまを御山に云ふは此の初月

月昇秋

侍位中御之

冬に初月を人の為と云ふは此の初月

養老祠月

侍位中御之

冬に初月を人の為と云ふは此の初月

蕭寺月

侍位中御之

月新し更りに初月を人の為と云ふは此の初月

葉中月

侍位中御之

雲とて初月を人の為と云ふは此の初月

死浴月

侍位

限を過ぎし月を人の為と云ふは此の初月

草菴月

侍位中御之

初りたる月を人の為と云ふは此の初月

庭月

侍位中御之

庭の草とて初月を人の為と云ふは此の初月

遠郷月

侍位中御之

浦人やの初月を人の為と云ふは此の初月

野店月

侍位中御之

野店やの初月を人の為と云ふは此の初月

国産月

秋意

草木の影を石の園に秋風は秋の月

水御月

経任

秋の月いふ方の秋よとをよめてあつた星は空の空ん

池上月

所製

大雲の雲しそわの月とて池の月のそよ風をね

海月

花屋

こいねの雲は山の月影や唐の月とて一人の心

浦月

侍従中納言

浪の上よ今そよ風は浪の浦乃秋の月日

磯月

雅言朝臣

さよの山とて秋の秋乃八月代もさよ秋の月日影もさよ

溪月

侍従中納言

尾の月とて秋乃八月代もさよ影もさよ

海月

同

浦乃八月代もさよ影もさよ

江月

花屋

古の乃八月代もさよ影もさよ

泊月

同

さよの乃八月代もさよ影もさよ

海月

具年

曇りたる月影もさよ影もさよ

龍月

龍志の下

龍志の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

梅月

おち御言

おち御言はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

月若遠し鳩

具成の下

具成の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

月若扁舟

會成の下

會成の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

月若行客

右氣の下

右氣の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

田見月

去親

去親はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

独對月

中製

中製はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

光情月

忠継の下

忠継の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

梅夜幽

侍位の中

侍位の中はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

松下梅夜

龍志の下

龍志の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

連束梅夜

右氣の下

右氣の下はた白糸のうらむしに月をまわくねそつれぬ

掛衣稀

融覚

梵のまじりぬめりさぬ里の庭もくはくなくらん

掛衣到曉

沖製家

夕つと月人そらくはくせん曉中さうのうらむ

山路兼

同

道あまや五年ゆらん毎ふ山に兼ふけり白鳥

水辺兼

同

波てしと身をそとくそ智えれぬまははる兼ふ

兼ふ被

侍後之臣

病の回よしそ身をそとくそ智えれぬまははる兼ふ

左村音

経任

いそ又通もそく掛衣れま屋そとく家里れ一也

兼備帆

皇后良大夫

二目厚のりそれをそとくそ智えれぬまははる兼ふ

兼兼兼

右三兼

兼士や石間傳ひらそよ山平くそとく兼ふ

兼海兼

侍後中卿

兼人のひそやゆひそとくそ智えれぬまははる兼ふ

兼兼

同

目新のりそやゆひそとくそ智えれぬまははる兼ふ

晴晴

左危府

目新のりそやゆひそとくそ智えれぬまははる兼ふ

初紅葉

雅言即

あつるこころ目もはなれ枝をたいつくふさささうり枝を

新大町云

新大町云

白鳥と秋はいつとよにて山はものころをさかすん

融覚

融覚

打ぬこころ秋の夕日新秋は紅葉もも文つらみにかり

貧有

貧有

今も秋はぬさくれぬ程なくしてさすくもらぬ秋は山里

おた府

おた府

山はり杉り知るはの多るんは深ぬ多るんは文とゆきある

河製

河製

深ふり目らう枝さうく枝のきちめさうせいのなまふりり

侍後中物云

侍後中物云

藤は川津ゆらん紅葉さうく田の枝の雪のれも葉を

源宰相

源宰相

芦の葉のなをさうくもそぬさぬははれ紅葉は枝さうり

志親

志親

志のわりりさうく紅葉さうくもそぬさぬははれ紅葉は枝さうり

御製

御製

木は金とさうくもそぬさぬははれ紅葉は枝さうり

秋徐暮

秋徐暮

秋のころ言の目新さうく枝ら田のなぬりさうり

言秋夜

竹屋中酒之

言秋夜乃又冬之うらみして夜中酒のわらわりの夜中

五七律

同

五七律わらわりのうらみして夜中酒のわらわりの夜中

鐘声送秋

雅言

いふんけつはつてより夜中酒のわらわりの夜中

情九月盡

三位中将

いふんけつはつてより夜中酒のわらわりの夜中

七十七首

山初九

竹屋中酒之

山初九のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

里河夜

同

里河夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

時雨是夜

おたつて

時雨是夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

おけ夜

献花

おけ夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

夕河夜

貫阿

夕河夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

河夜

同

河夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

松河夜

御制

松河夜のうらみして夜中酒のわらわりの夜中

秋の風

融覚

風くる瓦乃山の^いま^ま雲^のや^りと^さあ^らむ^村の^風ね

園の風

侍従之位

雲^のゆ^ふ園^の風^のき^らく^人の^茂と^する^神の^心ん

園の風

侍従之位

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

旅者時句

融覚

唐衣^とう^くも^ある^様ね^めと^神の^とを^とり^又と^りる^ん

山家時句

雅言時句

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

落葉時句

禅位

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

落葉如雨

大観

庭^の落^葉も^とさ^くし^ゆの^あり^て又^さら^うん

庭落葉

融覚

早^くも^て庭^の風^のの^この^ちり^と風^のの^この^ちり^と風^のの^この^ちり^と

園落葉

侍従中御言

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

落葉不待風

石多和清

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

秋の風

志継時句

秋^の色^とあ^りく^の残^の風^のの^葉ふ^くは^きれ^らる

野外霜

融雪

あつてふうささのあまの糸あけの神かみのさけの霜

樵路霜

同

言が原谷の妻木此追風よ霜をさきよてまぬか人

見残菊

同

秋を記く色深き菊の毛うふわぬ形か窮り

塩根をま

新古今言

玉露のうらなとあつく此秋のほどもまはる此物

洞室草

去親

さなふ霜をまを物あつ又うらなとあつ乃久

江を芦

雅言物

難波江を芦乃枯葉よ落霜小ほれ秋乃を物信

柘野物

具氏物信

世さなふ葉乃枯乃霜枯小ほれは色を葉記

冬曉山

冬名物信

霜あつ凡もさえ物をほよあけもあつたは也後

冬夕嵐

具氏物信

うらや嵐とまをてりよ此言も又まを信りり

冬車龍曙

同

冬ゆり記車を乃麻乃ゆきていふは神言ん

流物結

融雪

車ゆりも冬さあつんは雪乃氷水をさし初り也

水法書

源宰相

わさ法流ひよりれ今文字不書多一河の若はやきん

測水

最右府

風よりいすれ河乃あさ法此目代測も之をさる

汀水

右之兼督

よき之取法波吐音り新一法と坪一く志此取と記

石間水

前乃法もいささらつらん石間乃氷のそとれもさぬ

海冬月

おた舟

都にもかきささひん松橋やあまの屋家をれ書此月

池冬月

志親

浦之北印の池乃枕中くさ紀叔をささひん月よりさ

水御冬月

融光

池よりいささなん高りく去れ河系れをれ書此月

浦冬月

雅云初官

風よりいささささささ川釣と浦小くさ波さるれ

戸波冬月

侍従三位

波乃ささささささささささささささささささささささ

老兼冬月

三位中将

あさささささささささささささささささささささささ

池水鳥

侍従中納言

あさささささささささささささささささささささささ
あささささささささささささささささささささささ
あささささささささささささささささささささささ
あささささささささささささささささささささささ

松岡子言

新右衛門言

水多たうとねの岸よ鳴渡を松をうとて文人といふ

為綱代

融定

孫子 舟のれとさふ波は言ハくまき書やうと流の綱代

霞残夢

侍従三位

約原ぬ着れと地乃開古と此建正とてもやの書ふ

竹藪

同

竹近く何と東原ねとて文小書たりる船をせしむ

舊指目言

侍従中納言

著書は同一つれは説とめて日記はとれ指言一つ

世邊舊指

融定

持人のうとて思乃るて来よ同と信れ書はせり

初言

具氏部

路やんさふ急守に此里よとさうとて橋り書

浅書

志継初言

法ぬま成人のさうと改書れと申りてはるの書

換書

新右衛門云

もははら朝の書は此にたえと初らうとてははら

書中書

融定

年とより考の能をて埋本とてたうとて書の中書と

書埋松

皇名云書

冬ぬ存のと改訂は書よ松乃ねとて埋本より

伏見待入 同

さうとすくふ目救を猪りゆりまゝに認みたるは也書

音似花 侍従中納言

さぬまの毛可くさるるにさるるに山つせにさるる也書

釋中書 三位中将

後夜目好もつ目かさのさぬあらはの書は也書

遂目雪深 経任

あさり又ささるるにさるるに目つれは漢文也書

深山雪 侍従中納言

さし屋ささるるに奥の乃鹿ははりの書は也書

系書 御製衣

約約たあはまうせくうらぬさるるの系城は也書

池は也書 新七絶云

池は也書は清り也書のうらやともる家乃松も枝

漢道書 御製衣

半目ゆ漢の書は地はくと限りたはつる也書

侍従中納言

やうはさり同縁ふもはなり書小龍面も侍乃松

漢書 同

書は也書はとや称あまは田叢の清は書も也書

改書 御製衣

浪は也書は改乃別侍乃目は松格計ははりの也書

河辺雪

侍從中納言

降はりの雪をよみてみれば 氷は河辺に積る

水と雪

右筆判

氷水はふりまじりて 氷は雪と化す

秋頭雪

前大納言

雪は秋の初めに 降りては 雪の初

古寺雪

三位中将

雪は古寺の 鐘に 響く

炭竈相

源宰相

炭竈の相は 金糸の 相

向が火

同

煤火の相は 水も 相

歳暮雪

前大納言

雪は年の暮に 降りては 年の暮

家々歳暮

侍從中納言

雪は家々の 歳暮に 降りては 歳暮

恋百五十首

寄天慈

侍臣三位

空よりわらわぬ花も我も物なき時よあそを一家

一月一

あつらん命はふもあはまふあつらん何^{あつらん}らん

一月一

まよふにちき形見とくもあつらん何^{あつらん}らん

一月一

あつらん命のまよふあつらん何^{あつらん}らん

一月一

いふせむしうれさるひれ名よふたはらうらうら
寄山意 賢阿 相を

うらうら中にいひよらん高のれおとれはれん

一衆一 融光

誰火といふふたれん心まじりもあふのち狗光

一社一 去親

流ふ意やうらん早振神乃松本れう一庵ぬる色

一告一 侍長中紀云

浅く空界もつ一告くもあけてふいそをえん

一園一 冲製衣

あめま一治きたのそ水蓋は豊たさいふかたはら始

一社一 経任

こてしあ神もまああふといそいああ松のうらも

一野一 融光

りえこま款くも果いふまを契夫は智ちといひえん

一系一 禅伝

ゆりさあれとと系とといふは下ふ高がうらうら

一開一 侍長中紀云

あもねあをそれあめ或福徳の意くとい中紀開ち

一田一 志継邦

ふ事りりる水いとよきてり女引禰乃多を知ら
寄置云 右之書者

とにぬられ奥乃乱り色あふ乃置らるるいなり

一市一 侍後中紀云

後小女なりいなり市女ふよふぬ名ふなりは

一河一 前大紀云

年ある古河乃ふ志松乃りいふ事さもあひん

一池一 新大紀云

き神のりたりとや汝河にきりし庵とあへり

一江一 侍後中紀云

難波江乃き乃きねのりなりなりなりなり

一沼一 冲製 能あや

かこれふなりなりあひ我ら事也志記なり知命なり

一池一 志記

たりめさるる事其の池よとに志記つる其をいふ

一海一 侍後中紀云

和らう海より支流の舞ふふりなりなりなり

一浦一 前大紀云

か衣神一其浦小名なりなりなりなりなりなり

一濱一 雅言抄

いふ文壇にけしきありきりかたしむるは涙もけしき

寄磯志

融覚

いふゆりてそらわらぬ破よをそらふは身をさうてん

一 漢一

去款

空井に漢別く約丹乃おそも今よわきそ水

一 汀一

侍従中納言

浪小我身目もいよさけつて遠事かたにふりし浪

一 嶋一

忠継作

我意はらうこれ海もいふもそそめいふは

一 浮一

侍従中納言

さう海もいふはさうそめいふはけしき我彼れ

一 崎一

融覚

いふふもそめこれ海もいふはさうそめいふは

一 橋一

源宰相

浪小長柄の橋のそそめいふはさうそめいふは

一 綱代一

侍従中納言

綱代にいふそそめいふはさうそめいふは

一 舟楫一

同

難面もそそめいふはさうそめいふは

一 懸楯一

融覚

茶つゝまゝにけひた水まをひたれ神如月

奇松意

新大納言

かみちり心む松風をまきまゝにまき

一枚

融貫

中絶く又あひまぬ初河なりこゝに廿二申乃世記

一枚

同

多れれも申さざりてひもわたり難免に痛れは

一枚

侍候中納言

あつれれ多し申候様はの我の建候もさるは

一枚

新大納言

天は空月桂乃くめりからゆり神よ海に伝言を

一枚

海に桂乃芽はるるも示れぬ神を父の御中

一枚

新大納言

うたふらもゆてまのつんまのさるるをさるは

一枚

禅信

誓を六神ふけつ柳葉乃くぬ多乃芽をさる

一枚

新大納言

片思れ葉ひの相小海雨は言にそや人の言をん

一枚

紅葉

皇居より

本此より後ろひ約る人乃我をうまひ抄の河毎

一行一

侍従中納言

あり

逸事に乗ふる記以行乃つて記の事抄の事

一篠一

侍従三位

とれつゝ心かゝり袖をほそそと露斗はたかき

一菅一

侍従中納言

あり

手及と人をもとね真云乃中若の袖あけと

一葛一

去親

いふとんつ記乃是れ葛れ系れつて後いふ事

一葦一

融覚

世かたてしははる繁りゆきゆきとねれ

一葎一

侍従三位

つ建れくあさね記にり系れ名出ふりねと

一菖蒲一

冲製

りよそらあもろね菖蒲系れねと

一類一

新之助云

人らよと浮草れ系れつてとてとてとてと

一沼繩一

侍従三位

表そととてとてとてとてとてとてと

一藻一

侍従中納言

いそしや巻成りり此今れとわきううん 既悉れ

芳海松意

侍從中納言

急境りつひしとあられ給ふふりの色あぬをれうん

一葵一

新大納言

葵草とれり後ふとたためうつゆりふふは命とひるん

一遠一

去親

衣し色我しとひめとつり成しと給ん庭れふとふ

一苔一

侍從三位

あふもくや若のれ若蓬とふふれはうとみふ一哉

一芝一

新大納言

ゆりこの海や油よあまのうんふと記をりた芝の露

一浅茅一

忠継下

後しと露ととく^{いらい}るま^い海茅系とふうへの依綱より

一萱一

新大納言

ふととふふとれ露指乃るう下れままうらあハ

一忍草一

賢阿

君もふれとれまふふいあふあふ繋り音ままうらあ

一忘草一

範忠下

つきあふとれとふふ系は名のふかり血たうとふれ

一月草一

深宰相

月乎此後うひやと記んことふ川流あつて何れも
寄書云 至名邦

わうも鳴るもさうさ言ひは目もあつてなやせん
一郭云一 雅言邦

侍鳥をたつ鳥さふひさして籠面へよまらと鏡なり
一水雞一 範忠邦

鏡車へまらより橋乃をうはる鶴此故をゆゆ
一鷄一 志継邦

荒小く鶴此解も我もやぶれも果ぬればあふらん
一鴨一 軋寛

こゝ車の数括りつてねを鳴りつたは鴨のまね記

一雁鳥一 前尾府

著書乃らるる山を尋ねると甲一志路小くまより
一十鳥一 柳製

終車とさう一ふ書記鏡ぬ我がわりのれたふさ
一山鳥一 前大知言

山鳥れをのまらと記秋の書と記さうのそに外さうひ
一鷄一 右書書替

誰り又うれよふとぬ独ねをたぬ死書は書もやうせん
一雞一 経任

く急ぐらうらふじつききふふふふ
我にれはれを

奇蛛意

駐覚

萬さうらふじつききふふふふ

一巻一

同

我らりあひしはとぬくははるる能はあやう

一巻一

前大納言

養ら増やうらたしもさふふふふ

一松虫一

雅言部

あさふのあふもさう松虫たうねやう

一蜻蛉一

侘^シぬまの程や替んかきふふふ

一屋一

前大納言

うきさうらふじつききふふふ

一窓一

去親

あらしやうらふじつききふふふ

一庇一

尾名まふ

朽ぬまの海行乃板ひさう

一柱一

右名未答

一契りしもさうらふじつききふふふ

一床一

侍從中納言

あつてゆり波に也拙やり海、葉葉と露せらるる也

宰菴意

若大納言

今更よ待ともとり秋に葉の葉に落りたもいねえと

一門一

同

我門の柳の系れりる一もえさも今あひさるれ

一戸一

同

松たをま解は月のはよ近に音も人のいそるれ

一楹一

沖製衣

多月を中にかうりつたれまは一葉二葉も逢うもれ

一庭一

大親

つまもあまのいもさるいんせん野とすり庭に葉あふさ

一玉一

皇名三文字

何よりさひ初んを解とみり海にさうりすて

一巻一

若大納言

弟小も勇鹿もさるれふるさひさるえぬあひさるわ

一筆一

侍流三位

弟小もむむたをさるれまもさるる秋をまより

一テ一

侍流中納言

ふひくかともさるて梓ら我をさるるさるれ

一箭一

融覚

いふらんうたはさむい哉士なりあぬ福ふりあむ

寄簾意 融覚

かそく知もさやいん共簾意あむ好とういあま

一笠 源宰相

多岐也笠もなぬ露よたらくは袂もあむあむ

一表 融覚

為ねうそ田衣は清とたのむと後のもも京のあむ

一緒 侍従三位

絶なり果こころぬうははるあむあむあむあむ

一被麻 融覚

絶よら末に於ますあむあむあむあむあむあむ

一鏡 沖製

形んとそり色いあむあむあむあむあむあむ

一錦 侍従中納言

今これ後れあむあむあむあむあむあむあむ

一衣 経任

さよあふそりあむあむあむあむあむあむあむ

一糸 志親

あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

一布 同

陰奥の糸の海を布たせようか
支那の糸の海を布たせようか

寄席意

侍従中紀言

白りつらん契り計を結ひても
世間常中と云れぬ

一紐

志款

志あて程意や淑ん中紀言
計を血代契りて

新撰云
一造

冲製

流して志を結ひても
昔に我りた麻衣のり

一枕

侍従三位

歎くもて打も縁は
何れも一書は海と

一髪

融覚

玉うゝいふ縁一
本は小枕つゝき
繋りたけは事え

一拵頭

侍従三位

衣といふと京し
女子玉はつゝ
何れも一

一櫛

忠継翁

衣をともひ
何れも一

一匣

経任

白後よ繋り
中と玉うゝ
世に及ぶ方と云はる

一書

前大紀言

玉京の事
を結ひても
ひよと心は
何れも一

一硯

侍従三位

果又つ建入るさし後系現乃水と松あり流也

寄筆意

融是

意ともかきも危られぬ水蓋に流て流家流後松

一扇一

侍伝中紀云

と花此祓也此扇と露なりもつ建祓を繋りとも

一鑪一

忠継作

西彩鑪小かきとめてつら建是る人のあつこしと

一本繩一

右若未終為也一

人ひさしもあつとつら建是る繋り谷もあつ

一四子一

具御后

柳子寸松乃出つて風さるるさつとつ例を

一匠連一

侍伝中紀云

つらつとつ松の恨むさつとつ松の忠継

一藝一

前大紀云

物目寸松よりゆり松よりもつたさつとつ松の数をまける

一車一

同

ゆり松よりゆり松より多つたさつとつ松の数をまける

一船一

侍伝中紀云

堀江の昔も小松をさつとつ松の数をまける

一楹一

忠継作

後小成りきもの約から枕をも恨めと云うりや

一 寄破恋

源宰相

朽そのぬあまた小松乃りりあさもうはよひくうら

一 袋

同

松川やまぬのいささふた移りやと記らん

一 簾

賢阿

山陰のう松のうり我もやまをわたりえ海らん

一 燈

前大納言

焼乃ふよそびる灯乃さえすも物をあふはれ

一 綱

三位中将

河舟のまをせはをいづるを縄引て敷多を歌はれ

一 縄

源宰相

いそ海の巻たこま二筋にらる記物とを云う

一 袋

融覚

あかりの向はるる袋とつらやとれ昔を記す海也

一 袋

侍従中納言

恨てもひくもをひきまを存るをささる地盤は縄

一 織

源宰相

あささうら夜乃神のをけりゆらさひのあは

一 袋

前大納言

子所たきふしん厚れ乃浪ありも神乃海ふと陽なり

事綱意

雅言下

いそ海の網乃流縄我らたふひぬ人かこひ作

一答書一

侍返三位

つらも人のそと紀都ささふせまうりぬ海峯如

一凍一

源宰相

着然ふえの初えんむりゆらたさすむかふと

一鐘一

賢阿

馬れれがふら紀のよ別後と多うりさ思ひまうこ

一貝一

融覚

馬れ貝のそとれふとも他を推し同法とるふりや

雑百五十首

社頭期

前大納言

ちりこふまうたふさふの神はふ飛ぶたふん

一書一

融覚

明かうりふかから止ふ子振神はま代さのり

一柿一

同

目曇りゆく天照神のまろしとむうたにみくし露

一水一

源宰相

川水柱葉代をさすも天う着とて伝り先けを

杜頭雞

沖製

昔は曉やうと夜とて中つを多に夜のことと
祈年祭 賢阿

去母よぬとらひてそまふ年といふ事いふも
石清水臨時祭 雅云

出方の神ふまに梅花とて一松とて二とて

賀茂一 侍浪中紀云

神代よりけふまで流るゝかたそとよりまの流とて

春日一 去親

忍乃るる三蓋は枯ふ軟油と神事なりと山ひん

新嘗祭 沖製

新嘗祭

沖製

契りまや神のこころ成すに新嘗真意の首は

古寺風

融覚

君ふたりと流のしの葉とて入おほひふ松をぬ

一鐘

前九府

ふ代をさかしのあひらひらひらり落れひらうとつさせ

一澗

資有

まゝもつちもやまゝ一立野の若きとの澗

一路

去親

ふらりしはまゝいりむらむら入おほひの寺にまをす

古寺苔

具氏刻石

年深りて苔も生れて秘法山行に於て又もけり

冲舟會

望者之文

代を移りて此の法事等は其の終華に於て

寂勝講

新大納言

百支やう紀きりて此の法事等は其の終華に於て

仁王舎

冲舟會

その人令りて此の法事等は其の終華に於て

維摩舎

同

神宮内府より此の法事等は其の終華に於て

大衆舎

新大納言

神宮内府より此の法事等は其の終華に於て

系上行人

融覺

その人令りて此の法事等は其の終華に於て

鴻漁容

雅言部

その人令りて此の法事等は其の終華に於て

谷推丈

経任

その人令りて此の法事等は其の終華に於て

市高容

その人令りて此の法事等は其の終華に於て

拜趨積年

右共未替

あつて今いふとせまて小女はつゝもたを弄し後をそ

餞別欲夜

資有

旅衣を地をうけしをふふをせぬ月も新しき

眺望日暮

前大納言

詠解らびひ乃炭の印の山松のわら雲のこころをそつ

貞遊未央

同

ふ代をそそ此のふくま作小松き一方も末をうけし

孤安易覺

雅言刻印

とれをそそつゝもひは安とたふもあはれなれば

板書知昔

冲制家

昔やふれぬ繩と弦ひ垂て今ふれせし事とら後

神沖春

右共未替

いふとそつゝもひは安とたふもあはれなれば

一一文

融覺

まふれうにの道紙通くはらふは雲に風と後

一一秋

同

稀り初日投をそそふ交子の露日を夜秋風をそ

一一冬

深宰相

海雲に野をそそふ初日をそそふ初るる吾独は

釋中曉

志健舒

朝人く曉をわたりてききしるを松ありけり月

一 朝

禅信

如露に記てりるを松ありけり神小乃の宿り

一 晝

守者之文吏

水地に記し其陰小酌とめて松ありけり自はけぬ

一 夕

侍長中紀云

衆多に記し自は松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 夜

深宰相

約を記し其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 風

禅信

急雨に記し其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 雨

神製

急雨に記し其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 烟

新紀云

言に記し其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 山

銘任

松に目殺ありけり其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

一 野

禅信

予の松ありけり其陰小酌とめて松ありけり其陰小酌とめて松ありけり

四釋中開

雅言詞長

秋芳此奉少交多のそとねと急きまのり此関

一一河

侍從中納言

るふけり目敷ふ付く角国別致をきく急わりのり

一一船

御製長

神乃^{後古}松とちらん橘のりふふせり松まは浮船

一一指

侍從中納言

藤ふらうく松けく東路乃き松ふけりまらゆるらん

一一衣

自是節下

ゆきぬ葉の松のり衣落をくく神のりゆ

一一枕

侍從中納言

つありそのよ幾敷をさぬ旅衣やうらやと松まはるらん

名所山

希古納言

吾世の雲はやたも絶よらん世のさうりいふゆ家いす

一一野

侍從中納言

臨その一松なりをい多のびくれ葉はまけし^子ひり^子ひり

一一思

希古府

かりねよりあはる乃思のらふまはるるぬ葉まらり^り

一一林

雅言節下

月影のひまはまきるらん雲の林乃葉のあはれ

名市村

去親

いさし約人厚とさかん河と此ゆりてはる目言なり

一里

融覚

露霜よ久もくはぬ兵弁乃伏の人此雲の衣を履て

一開

右兵衛督

清見と浪乃関守とたぐいさあはくの毛年たはらん

一驛

侍長中納言

やうけり居あそけりては麻山開たじりなりは

一田

同

やふ早のいささふおろひを御人の田道あさうせそく

一滝

中製

今り又訪て色之る石をゆりて滝はせ流を為ゆ

一河

侍長三位

はるまのふひまてそ代の約束もたて関の友は

一堤

融覚

幾度うたの帯とて唐紙乃池のつまを川とて人

一溪

侍長中納言

長閑なりあさうさみそく水蓋はては溪の浪をり

一津

中製

今ふ松冬このりけり浪波はし首おゆり梅をば家

山家塩

中製家

今はうき世に別とてをたれとて多しをのり垣

一一一戸

新大納言

宋は戸を所てを岩は月をえんは去と繋り人

一一一棧

侍從三位

山はく袖は用いたりの多し秋のさひしき

一一一鳥

経任

船勢も深文と云は岩のさしは長きひと支るれ一と云

一一一経年

新大納言

とて心乃面をとめぬ山は井にいとまもさるるを

一一一侍

侍從中納言

山は山に到てふ不実一をさるるつて而も彼は

一一一急行

新大納言

友と多初なりけり東不文まのさるる并の云風

一一一麓志草

禅信

貴と葉のさるる花は海子のさるる行とてさるる

一一一踏草

新大納言

あさち来とまてれたに踏及成色やうらに同つを

一一一洞草

賢阿

山中此陰の小葉もやたし不答ふさるるやう

雲藤

融覚

露花のつらさ乃雲の玉藤に光極るふ附目族那

石三草

源宰相

誰とも三つ草の極る今つらさ此石よ極るん

巖麦門冬

侍辰中納言

六つ草のつらさよあつらさ是雲の霞と世命のつらさ

河玉藻

同

風波の浪にまよきそ河のまよきまよき此下まよき

沼草

前丸府

五つ草のつらさもあつらさ此水に對合もつらさ此下

江菅

侍辰中納言

みさひかり掃江のま菅下にありて施ぬまよき此下

砌

具氏節

み海夏も砌のつらさもあつらさ此下松の梢を渡るれ

庭合歡

同

ひるあまそ色小そつら神の来つらつらあまそ名は

山椿

同

限りつらつらつら山に幾代と色は極るつらつら

炭桂

侍辰三位

つらつら風も今言すそ秋つらつら此炭を果し

松檜

具氏解

茂くあふ松葉茂くは流し松葉の松も若くはなりなり

杜欒

資有

尋多約杜乃わたりなりなり建精にたりは松乃びん

罌椎

最古約云

深居はたふ入る罌椎たふなれ松もつまれのころ罌椎

杜葉葉

同

吹正さふふふふふふも葉ありふふふふふふふふふ

淡楸

同

凡そ浪たふをうり淡楸はくまふふふふふふふふふ

破櫃

源宰相

荒破やまきにいそり櫃はたふのふふふふふふふふ

率金末

侍長中約云

率金末のふふふふふふの志こふふふふふふふふふ

一玉

融寛

和奇は浦河の流ふふふふ世はあふふふふふふふ

鏡

前九府

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

一錦

侍長三位

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

寄録述懐

新去約云

比ふ交し多し却て一知りて深乃糸此云云其終は

一布一一

侍長三位

七夕織る布此糸云云此糸のひをきれたらひを

一衣一一

侍長中納言

向ふ後より此糸をき取つて糸つちをきりて

一紐一一

侍長三位

並に乱れ取つる紐此糸の糸をきりて我よりん

一枕一一

沖制衣

我ひら成枕うつて糸をきりて糸をきりて

一筵一一

融寛

云々此糸の真の筵延受一糸をきりて

一扇一一

同

何れも此糸をきりて扇乃風もとらるる

一燈一一

侍長三位

乃ら手に持てて此糸をきりて世をきりて

一簾一一

志親

秋風乃簾うこう又言もこの糸をきりて

一弓一一

具氏下

浮舟を引かき梓らまに送る時いふ

事著述懐

皇居を交す

く解とわくとおもやたふひまほほ有治する世はよき
一 琴 一 新五節云

いふもあつとをこれいふ一程とてやぬ我うの非
一 笛 一 御製

未の世とふも久一あり毎さうてと笛の音もいそげ
一 車 一 侍従中納言

あふ家方たあさうと少一いれ中一仕事はわが吾れハ
一 船 一 経任

其才世にまうとめれ控あはれ命一と何しん毎

一 袋 一 新五節云

袋を此揮とりたる業はあまりてたはあふいりり
一 天祝 一 禅位

天はそ久一と世代の約束はあはれ我れ之り
一 目 一 侍従中納言

くありあき花の初月此新ふくと吾れ久一と世代一と
一 月 一 範忠節

あふまのまのあはれをさうと照月此あ年此秋をなす
一 星 一 皇居を交す

あふまのまのあはれをさうと照月此あ年此秋をなす

寄函祝

侍從中納言

御取付時成候之御代々事進上之御事を承りて

一 地

融覚

うへに多く定玉けりおし多分候へども久しかり

一 國

新大納言

正しく此の御事也けりおし多分候へども久しかり

一 郡

道右衛門

長らく代々承りておし多分候へども久しかり

一 都

新大納言

いふ事もさうし多分候へども久しかり

一 道

忠継御后

古北治を尋ね

いふ事

みちのけ御后

きんもろり



